

Title	嘉靖年間における浙海の私商及び舶主王直行蹟考(下) : 海禁下に自由を求める一私商の生涯
Sub Title	A research on the private traders along the Chekiang Coast during the Chiaching (16th Century) Period and on the history of captain Wang Chih : A private trader's life under the embargo age
Author	李, 猷璋(Li, Hsien-Chang)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.34, No.2 (1961. 12) ,p.43(163)- 83(203)
JaLC DOI	
Abstract	In the second part, are traced the activities of Wang Chih (王直) in the Sino-Japanese private market. 1. Wang Chih before the arrival in Japan. From the Jipen ichen and other sources it can be presumed that Wang was an educated man, and that during his youth he struggled against poverty, and later he went to the sea coast. 2. How Wang induced the Japanese traders to go to China. In 1545, when the Japanese delegate Juko was going back to Japan, Wang accompanied him and tried to induce Japanese traders to go to the Chekiang coast. Probably during this trip he reached Goto and from there sailed back to Lequios. The story of 'Wu Feng' (五峰) found in the Teppo Ki might be a development of this trip. 3. Wang's activities prior to his becoming a ruler. In 1547 Wang established his headquarters in Goto, and travelled between Ningpo and Goto, developing trade. He soon became a big ship-owner. In 1549 he took up arms and defeated the local pirates. Therefore he was permitted to continue his private trade. Later he was stationed at Li Kang, and in 1551 defeated Ch'en Szu-p'an pirate, and became a sea coast ruler. 4. The frame of Li-Kang and its destruction. In Li Kang, Wang made himself the King of Ching Hai. The people and traders recognized him and obeyed him. Later, a Wang Shu became the Provincial Commander-in-chief and expelled Wang Chih, who fled to Hirado, Japan in 1553. 5. Wang's life and business in Japan. Wang settled his men in Goto, but he himself stayed in Hirado and made himself the King of Huei (徽王) dominating the private traders. 6. The Great Japanese pirates and the death of Wang Chih. Although Wang was an ambitious trader, he constantly opposed the pirates. No record is found which might indicate his conspiracy with the Japanese pirates. Therefore, when Chao Wenhua and Hu Tsung-hsien the sent Chinese delegates to Japan calling Wang back, Wang conceded without any hesitation. But because of misunderstandings, Wang was accused of being a pirate and was beheaded at the end of 1559.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19611200-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

嘉靖年間における浙海の私商及び舶主王直行蹟考（下）

——海禁下に自由を求める一私商の生涯

李 猷 璋

まへがき 王直の行蹟については、當時の海防官憲の奏議や戦記及び倭寇關係の公私記録に散見してゐるが、誘殺されるまでの二十年間のことを書いたものには、嘉靖三十九年の胡宗憲修・薛應旂撰の浙江通志卷六〇 經武志に田汝成作として引かれてゐる「王直傳略」がある。傳略の内容は、王直の行蹟を恣意に歪曲し、また誘降の部分を詳述して胡宗憲の功を上げたもので、田汝成が書いたとするのは疑はしい。翌四十年に出た鄭若曾：籌海圖編の大捷考にも、それが「擒獲王直」と題して掲げられてゐるが、嘉靖初刊本・隆慶重刻本は勿論、天啓版の初印本までは撰者名を記してゐない。袁褰の編する金聲玉振集海寇後編に「汪直傳」と題して取入れられたのも同じで、文末袁生漫記に「直叛逆之跡、不知述於何人」とあるのによると、嘉靖中にはそれが不明とされてゐた。徐海に關する一文が茅坤の筆になることから推して、これも宗憲に近い人が書いたとすべきであり、王直の處置とその影響が政治問題化してゐたために撰者名を伏せたかと思はれる。

その後、籌海圖編は「擒獲王直」を謝顧撰と記すやうになり、古今圖書集成第三十七卷 日本部彙考及び王先謙：日本源流考の引用する「擒獲王直」にも謝顧の撰としてゐる。謝顧は大捷考の中の「仙居之捷」を書いた嘉善領導であるが、勿論偽託であらう。四庫全書には傳記類存目六に戸部尚書王際華家藏本の不知撰人名氏「汪直傳」が著録されてゐる。清、嘉慶の張海鵬輯：借月山房彙鈔（と道光の陳瑣校刊：澤古齋重鈔）に收められた「汪直傳」も撰人不詳とあるのは、王直の姓を汪に作つてゐることから見て、金聲玉振集の系統を引くものと推察せられよう。

王直傳略と擒獲王直との内容は、例へば冒頭の一句が傳略では「王直、徽之歙縣人」とあるのに對して、擒獲では「王直歙人也」、「徐海以次就擒」の次に「事見茅坤紀剿徐海始末中」とあるのが「事見徐海傳」となつてをり、また、前者に「王激出洋爲颶風所覆」

の一句を缺くのと、最後が「胡公親督官兵盡掃除之」で終つてゐるのに、後者では「公親督官兵掃除、黨與皆絶。」とあつて、つゞいて嘉靖三十九年の封賞記事が追補されてゐる外は同じである。よつて本稿では傳維麟纂：明書卷一百一十三列傳二十の亂賊傳にも、萬表：海寇議や右「擒獲王直」などを纏めた汪直傳が出てゐるので、兩者を區別するためと、内容にふさはしい點とから、原題「擒獲王直」記として引くこととする。勿論、それを批判的に利用すること云ふまでもない。

目 次

- 一、日本渡航以前の王直
- 二、倭商を誘引しはじめた経緯
- 三、海上を制霸するに至るまでの活動
- 四、瀝港の體制とその覆滅
- 五、日本における生活と業務
- 六、嘉靖大倭寇と王直の死

一、日本渡航以前の王直

王直の生立については、擒獲王直記の冒頭に、

王直者徽之歙縣人。少落魄、有任俠氣。及壯多智略、善施與。以故人宗信之。一時惡少若葉宗滿・徐惟學・謝和・方廷助等、皆樂與之遊。間嘗相與謀曰：中國法度森嚴、動輒觸禁、孰與海外乎逍遙哉。……於是遂起邪謀。

とあつて、從來、王直の關係記述には必ず準據としてひかれて來た。右によると王直は生れながらの俠客であり、長じては惡少とそのまゝ海盜となつたやうに書かれてゐるが、これは信じられようか。例文の中略の所に「直因問其母汪嫗曰：生兒時異兆否？汪嫗曰：生汝之夕夢大星入懷、有錢冠者。詫曰：此弧矢星也。已而大雪、草木皆冰。直獨心喜曰

：天星入懷、非凡胎。草木皆冰者、兵象也。天將命我以武勝乎。」といふ異生譚があるのを見て、彼の梟雄ぶりによつて傳記作者が型どほりに作つたものと見ねばならぬ。しからばわれわれはその出自を改めて考へる必要がある。

先づ王直の姓名は、恰も彼の行動のごとく、至つて明かのやうで、始終誤まられてゐる。後の叙述のためにも、それを一應考へて置く方が便宜であらう。彼の活躍中に書かれた萬表：海寇議を見ると、「王五峰、名直」とある。これは王直が本名で、當時は五峰として通つてゐたことを示したものである。しかし、鄭舜功：日本一鑑の窮河活海卷六流逋では「王直的名鏗、即五峰」とあつて、的名は鏗だとも云はれる。違法の行動あるひは特殊の生活に入るとき、人は諸種の考慮から名を換へることが多いが、王直も海に下る時に「鏗」を「直」に換へたのではないかと思はれる。

明實錄 嘉靖三十六年十一月乙卯條

の王直擒獲の奏聞に「直：號五峰」とあるごとく、彼は五峰と號した。積極的證據はないが、双

嶼港が懷滅するまでの文獻には王直を五峰と書いたのが見えず、寧ろそれ以後の記録に、日本へ行つた後、「島夷が五峰船主と稱した」とあるので、五峰とは彼の最初に集くつた五島の名に因んでつけたものと推察せられる。（明代の日本圖には五島を「五山相錯、名五島」と注記するのが常であつた。）たゞ、嘉靖三十六年の九月、王直自身が江口より軍門に上疏を乞ふた奏請文には「帶罪犯人王直、即汪五峰」と冒頭してあり、號を用ひる場合は「汪」を冠した。擒獲記の「汪姫」云々が信じられるならば、これは彼の母の姓を取つたものである。従て後代の編纂物に、本名と別號とに用ひる姓を相互に混淆し、王五峰（海寇議）にしたり、汪直（明史）に作つたりすることの誤なのは云ふまでもない。四庫全書提要に「王直」を以て傳寫の誤かと疑ひ、倭寇研究家が今もなほ汪直と書くのは笑ひものである。

さて、王直は前述のやうに徽州歙縣の者で、歙縣志卷三武備兵事では縣南結南人とある。窮河話海卷六流逋の王直伏誅の記事に「王直的名鏗、即五峰。初以遊方下海。…」、また「備按得直本是遊民、初以圖利下海。」とあり、彼を遊民の

出身としてゐる。擒獲王直記に「少くして落魄し、任俠の氣あり、…一時の惡少…、皆樂んで之と與に遊ぶ。」といふのは、それを傳記風に敷衍したものである。しかし、惡少と稱する者のうち、徐惟學のごときは商人であつたらしいので、擒獲記は一般論によつて作られた疑が多い。

前引明實錄に、胡宗憲が王直の擒獲を奏聞して、「直本徽州大賈、狎于販海爲商」と述べてゐる。もと徽州の大賈といふのは誇張であるが、彼は巨艦を造つて南方との互市に活躍したので、海に販するに狎れたことは認められよう。張時徹：寧波府志^{卷二}海防書では、もつと具體的に「徽歙姦民王直^{即王}・徐惟學^{即徐}碧溪先以鹽商折閱、投入賊夥…」とある。

この記事は、大賈と云はれた王直と鹽商であつた徐惟學とを書き分けられなくて、一諸にしてしまつたと思ふが、若しさうでなければ、窮河話海・擒獲王直記とは勿論、胡宗憲の奏聞とも齟齬することにならう。王直は双嶼港に入つては許二の管櫃に任じ、日本へ行つては儒生と稱せられたのを見ても、少時から教育を受け、若干の文筆素養を持つてゐたのは争へない。しかし、以上の資料に基く限り、われわれは、彼が青年時代に一度落魄して遊民となり、後にその逆境を脱れるため、二三の仲間と海に販するの商に乗り出したことを知るだけである。

ところで、王直の海に下つたのはいつ頃であらうか。この問題も擒護王直記には、

嘉靖十九年、時海禁尙馳。直與葉宗滿等之廣東造巨艦、攜帶硝黃・絲綿等違禁物抵日本・暹羅・西洋等國。往來互市者五六年、致富不貲。島人大信服之。稱爲五峰船主。

と、いかにも嘉靖十九年に下つたやうに記してゐる。しかし、この年は、許兄弟の招來したポルトガル人が絡繹として浙海に來市し、劃期的衝動を與へたため、箭垛式に寧波私商のことは何でもその年代にこじつけられるので、俄かに信用しがたい。窮河話海卷六王直伏誅記事の註に「王直：初以遊方下海。於歲庚子、乃與許一…等誘引番夷來市浙海。」と

あるによつても、下海年代は庚子と若干の時間的隔りのあることが感じられる。たゞ、私商がこれらのポルトガル船に刺激されて一齊に新しい行動を始めたこと疑ひないやうに、機敏な王直にとつても何らかの意味でひとつの轉機となつたことはあり得べきであらう。記事によれば「直は葉宗滿らと廣東へ之き巨艦を造り、違禁物を携へて日本・シャム・南海その他へ抵り、往來互市し」といふ。そのうち日本へは後述するやうに嘉靖二十四年に始めて行き、倭に通じた後は夷との商を止めたので、二十四年までは専らシャムや南洋諸島に互市したこととなる。當時の違禁物の貿易利益は明末の關係文獻にも投下資本の三四倍乃至十倍に達すると書かれてをり、五六年で富を致すのは不可能ではなからう。たゞその期間における王直の活躍狀況は皆目不明で、彼についての記録が現はれたのは、許二と合綜し日本へ出向く頃からである。

王直の許二と合綜したことは、籌海圖編^{卷之八} 寇踪分合始末圖譜の王直の項に、「〔嘉靖〕二十三年入許棟踪、爲司出納。」とある傍注によれば、彼は許兄弟の双嶼港に泊りこんだ翌年に彼らと合綜をしてゐる。許二と合綜する以上、王直も多少の船を持つてゐなければならず、彼はそのときすでに船主であつたと思はれる。許棟の踪においては、海寇議にも「在許二部下管櫃」とあるが、重要な會計の役に立てたのもそのためであらう。とき恰も、日本貢使の釋壽光らが來てゐたので、合綜した理由は文字を知る王直が必要になつたからではなからうか。翌年貢使の歸るに際し、王直は前引寇踪圖譜に「爲許棟領哨馬船、隨貢使至日本交易。」とあるやうに、許二の船を率ひて日本へ行つたが、翌年双嶼港に戻つて來てからは縁が切れたので、それは一回きりの臨時的合綜に過ぎなかつた。

二、倭商を誘引しはじめた經緯

王直の日本へ往つた年代について、籌海圖編の記事には混亂がある。同書卷之八寇踪分合始末圖譜の許棟の條に「此浙直倡禍之始、王直之故主也。初亦止勾引西番人交易、二十三年始通日本、而夷夏之釁(明)門矣。」とある。これは許棟自身が二十三年に日本と通じたとも解せられるが、さうすると、それによつて夷夏之釁が開かれたといふのは可怪しい。同圖譜の王直の條に「先是日本非入貢不來互市。私市自二十三年始。許棟時亦止載貨往日本、未嘗引其來也。」とあるのを見ると、日本が互市に來たといふ意味である。しからばそれは壽光らの來朝を指すらしいので、明實錄に、

〔嘉靖二十三年〕八月戊辰。…至是夷使釋壽光等復來稱貢。…詔如例阻回。
と見えてゐる貢使の一行に外なからう。

釋壽光らの船は疾くに柏原昌三氏が指摘したごとく、種子島家譜に「天文十二年四月十四日二合船解纜渡唐。同十四年六月十四日渡唐船御歸朝。」と見えるものである。鐵砲記によると、

我嘗聞之於故老曰：天文壬寅癸卯之交、新貢之三大船將南遊大明國。…艤船於我小島。既而待天之時解纜、齊橈望洋向若、不幸而狂風掀海……。一貢船檣傾機摧化鳥有去、二貢船漸而達於…寧波府。三貢船不得乘而回我小島。翌年再解纜遂南遊之志。

とある。即ち十二・三年の交に種子島において艤装し明に向つた船は、暴風のために一隻は難破し、一隻は寧波に着いたが、一隻は戻つて來て翌年に再び渡航した。鐵砲記はこゝでも艤装の年を一年違つたやうで、明實錄の記事は三貢船のことゝ推察せられる。一行は阻回を詔せられたけれど、勿論、例によつてたゞでは歸らず、寧波にて大いに互市をしたのは云ふまでもない。

籌海圖編卷之十二經略の開互市の項に編者鄭若曾の按語として、

自甲申^(辰)○廿三年歲凶、双嶼貨壅。而日本貢使適至。海商遂販貨以隨售。倩倭以自防、官司禁之不得。西洋舶原回私澳、東洋船遍布海洋。而向之商舶變爲寇舶矣。

といふ記事がある。歳の凶なるは嘉靖定海縣志^{卷四}十三祥異に「嘉靖二十四年大荒、穀價騰踊。每銀一錢易穀一斗。道殣相望。」とあることゝ繋がるであらう。それで双嶼港の物貨が壅滞してゐたところへ、日本貢使が實力による自衛の下、むやみに交易をなし、浙海の私商を騒がせた。明實錄の嘉靖二十四年の項に、

四月辛酉、督令還國、而各夷嗜中國財物、相貿易延歲餘不肯去。至是、巡按浙江御史高節請治巡視備倭等官故縱之罪。因禁之。

とあつて、壽光らは二十四年六月に漸く歸つたのである。王直がそのまゝ跟いて行くに至つたのも、その交易の刺激によるものと考へられよう。

王直の日本渡航は、籌海圖編の寇跡圖譜に、

二十三年入許	爲許棟領	二十七年許棟
哨馬船隨	爲都御史朱紘	
王直——入雙嶼港——往日本——改屯列表……………		
棟踪爲司出納	貢使至日	所破直收許棟
本交易		餘黨自作船主

とある「入双嶼港」と「往日本」の傍註が、つゞけた文章として讀めるのと、後者が許棟と共に行つたといふ意味にも取れるために、しばしば嘉靖二十三年に誤解された。しかし、彼は日本貢使に隨いた行つたもので、窮河話海卷六海市の條にも、

〔許一・許二等…〕夥伴王直的名銓即五峯於乙巳歲〇廿四年往日本。始誘博多津倭助才門等三人來市双嶼。と見えるやうに、嘉靖二十四年が正しいのである。

問題なのは、南浦文集卷之三鐵砲記にポルトガル商人と種子島へ來たといふ五峰である。

隅州之南有一嶋：名種子者。先是天文癸卯八月二十五日丁酉、我西村小浦有一大船、不知自何國來。船客百餘人、其形不類其語不通。…其中有大明儒生一人名五峰者、今不詳其姓字。時西村主宰有織部丞者：以杖書於沙上云：船中之客不知何國之人也。何其形之異哉。五峰即書云：此是西南蠻種之賈胡也。…以其所有易其所無而已。非可怪首座者也：告之於我祖父惠時與老父時堯。時堯即使扁艇數十拏之至。於二十七日己亥入船於赤尾木津。于斯之時、津有忠者、日州龍源之徒也。欲聞法花一乘之妙、寓止津口。…偶遇五峰、以文字通言語。五峰亦以爲知己之在異邦也。…賈胡之長有二人：一曰牟良叔舍、一曰喜利志多佗孟太。手携一物長二三尺。…既而人名鐵砲者。…一日時堯重譯謂二人蠻種曰：…願學焉。蠻種：答曰：…我亦罄其蘊奧以告焉。…時堯：求蠻種之二鐵砲以爲家珍。…把玩之餘、使鐵匠：新欲製之。其形制頗難似之。其翌年蠻種賈胡復來於我島態野一浦。…幸有一人鐵匠。時堯：即使金兵衛尉清定者學其底之所塞。漸經歲月、知其卷而藏之。於是歲餘而新製數十之鐵砲。

右によれば、五峰（王直）は天文十二、すなはち嘉靖二十二年に南蠻人を種子島へ案内して來たといふが、それはどうであらうか？

ポルトガル人の日本發見については、諸先學が論じつくしたやうに、Antonio Galvão の世界新舊發見史に、一五四二年フレイタスがシャムのドロラ市にキャプテンとしてゐた時、アントニオ・ダ・モタ、フランシスコ・ゼイモトとアントニオ・ペシヨトの三ポルトガル人が脱走し、リャンポーへ行かうとしたが、颱風に遭つて東の方三十二度にある

ジャポンエスの一島を見た——とある。これはエスパニア船隊の Garcia de Escalante Alvarad が、同じガルワンから聞いたのを報告した書翰には、レキオスと見えるが、そこに着いて好遇を受けたとある。多分メンデス・ピントーの冒險航海記やアジク圖書館の日本教會史に漂着地が種子島と出てゐるやうに、九州と琉球の間にあつた島だからであらう。たゞ、西洋の文獻ではピントーを除き、いづれも日本發見を一五四二としてゐるのに、南浦文之の鐵砲記では天文十二年即一五四三年とあつて一年喰違ひ、また、乗つたジャンクが暴風に遭つて漂着したとあるのが、一大船が通商に來航したかのごとく記されてゐる。王直の事蹟とも關聯するので、次にそれを究明して見よう。

ところで、鐵砲記の記事を整理して見ると、

1. 天文十二年に來航南蠻人から二鐵砲を求め、…新に製せんとしたが、その形制似ることがたし。
2. 翌年、賈胡が復た態野浦に來、金兵衛に底の塞ぐ所を學ばせる。

3. 漸く歲月を経て、その卷きて藏ふを知る。是に於て歲餘にして、新に數十の鐵砲を製作す。

といふ順序になる。それによると、鐵砲の模造に成功したのは、早くて十三年末であり、新に數十を作上げたのは十四年末か十五年に入つてからである。しかるに、鐵砲記の末尾には、天文十三年とその翌年に種子島から大明に向つた貢船につき、「將歸本朝、船遂飄蕩達于東海伊豆州。…船中有我僕臣五郎三郎者、手携鐵砲。…州人見而奇之。窺伺倣摹、有多學之者矣。」とある。貢船は嘉靖十三年六月に寧波に着いてゐるので、春汛には出發したとすべきであるが、そのとき鐵砲を持つて行つたとすれば、鐵砲の傳來は上述の模造經過に照して、少くとも一年前に引上げねばならなからう。鐵砲記を検討しても一五四二年とするのが正しいのである。

次に數人の漂着が私商百餘人の來航となつた理由は、それに大明儒生五峰が伴つて來たとあることから、違つた話

を接合したものと思はれる。鐵砲記は題下に「代種子島久時公」とあるので、南浦文之は当然種子島家の資料を提供せられたし、本人も島津藩の側近として永く薩摩に住み、現地の傳承には詳しかつたはずである。鐵砲記にも鐵砲の傳はつた翌年にまた賈胡が來たと見えるやうに、そのころ南蠻人が引續き來航し、諸種の資料があつた。それを文之が鐵砲記を纏めるに当り、恣意に取捨してひとつの話にしたからではなからうか。五峰即ち王直が一役演じたかのごとく記されたのもこの例に漏れないと信じられる。

按ずるに、三ポルトガル人は脱走船員である以上、私商か海賊の船を利用する外なく、中國人が彼らを載せ、從て明人の船主がそれに干與する可能性は多い。しかし王直はその年日本へ來た形跡が見當らぬ上に、「五峰」といふ號は五島へ巢くつた後につけたものらしいので、鐵砲記の記事は信じかねる。さりとて、五峰についてはその言動及び對話の相手・内容や反應が具體的に描かれてゐて、簡單には否定し得ない。恐らく少し後に行つた記録があつたのを、「五峰船主」として有名になつた時代に、最初の南蠻人を運んで行つた明人の「船主」をそれと錯覺して入れたものと推測せられる。(曾て後藤肅堂は、王直の如き海賊の巨魁の大船が、ガルワンやエスカランテらの傳へるやうな事情で初てポルトガル人を種子島へ載せて來たとは首肯しがたいと主張した。しかし、王直が一五四二年即ち嘉靖二十一年代にどの程度の巨魁であつたかを知るべき資料はなく、この推定は後代の王直をそれにあてはめて考へたもので、全く根據はない。まして、ピンターの記事は虚構が多いとしても、ランパカウにおいて、彼らを乗せ、一諸に種子島へ漂着するに至つた船主は、漳州の海道に追はれたとき、二十八艘の船を率ひ、二十六艘を捕獲され、残りの二艘で遁れてそこへ來て碇泊したサミポシエカであつたとあるにおいてをや。)

然らば、王直は種子島へ行つたか、行つたとすればいつ、どうしてであらうか。このことを匂はせてゐるのは、メンデス・ピンターの冒險航海記である。同記によれば、ピンターらのポルトガル人はタニシュマに漂着した後、彼自身は豊後へ行つて數ヶ月滞在したが、便乗して來た中國海賊船が歸ることになつたのでタニシュマへ戻り、仲間と一緒にリヤ

ンポーへ向つて出發した。冒險航海記の第一三十四章に次の如く記してゐる。

その地リャンポーの住人たちより我らは甚だ歓迎せられた。彼らは……我らに何れの國より來り何れより中國人と同船したかを尋ねた。それに對して我らは經驗したとほりに答へ、また……我らの發見した日本と、……中國の商品により得られる巨利のことを彼らに傳へた。……皆は……このやうな大きな恩寵を知つたことにつき、主に感謝を捧げようとて敬虔な禮拜行列を行なつた。……行事が終ると、直ちにその町の大部分の人々に、この航海の魁たらんと熱望が起つたので、彼らは相反目し徒黨を組んで……その地の商品を買占めやうとするに至つた。……一ピロ四十タエルの價であつた生絲を僅か八日の間に百六十タエルに昇らしめた。この利得への渴望を以て僅か十五日にしてその港にあつた九艘のジャンクが艤裝せられた。凡てのジャンクは……不十分な準備を以て……、何れもある日曜日(五島)の朝……盲目的に出帆した。その一艘に予も乗つてゐた。……夜半になつて大暴風雨に襲はれたので、三十八度の位置にあるゴトンの暗礁に悉く乗り上げた。この遭難では九艘のジャンクのうち二艘のみが……助かり、七艘は唯一人も救はれることなく失はれた。……六百人の死者の中には百四十人の相當な且つ富裕なポルトガル人が入つてゐた。我らの不思議に免れた二艘のジャンクは航程をつゞけ兩船同航してレキオスに達した。

——岡本良知氏訳による

ピントーの紀行ではしばしば時間が前後し、この記事にも年月がないが、諸先學は彼の前後の旅程によつてその日本漂着を一五四四年のことと推定してゐる。さすれでリャンポーへ向つたのは翌四五年即ち嘉靖二十四年にならう。

しかし、右の一節を吟味して見ると、壽光らの寧波における交易と非常に相似てをり、従て王直とも何かの關係がありそうに見えるのが注意せられる。第一に、リャンポー在住のポルトガル人がピントーらの話に利欲を唆られ、奪合ひの買占をして日本行に狂奔した状態は、前に例示した壽光の一行と海商との間になされた盛んな取引と軌を一にし、第二

に、リヤンポーから出發した時期が貢使の歸朝と王直の來日とは年月が同じであり、鐵砲記によると貢舶のひとつは伊豆州へ漂着したといふので、遭難まで步調を合せてゐること。第三に、遭難が偶然にも王直の間もなく根據地を置いた五島に乗上げたとし、またその隨いて來た貢使の發着地で、後に彼がポルトガル人で行つたとされた種子島の近島レキオス（琉球）に廻航したといふことなどである。以上の理由から、われ／＼はピントーが壽光らの市易に活氣づいた諸島の狀況と、それに刺激せられて海商の間に起つた日本熱とを見聞し、それを彼ら自身の話に動かされたかのやうに物語化したものと思はれる。

貢使に隨いて日本へ行つた王直の行程は明らかでない。假へ壽光と同行したとしても、彼らの船は伊豆へ流されたので別々になつたであらう。從來の密切な關係から考へて、王直はそのポルトガル人と同行したと想像せられる。ピントーによれば、ゴトンで暗礁に乗上げた九艘のうち、七艘（六百人）が難破し、助かつた二艘は同航してレキオスに至つたと書きながら、一三七章以下の大レキオス漂着の方では一艘（九十二人）としか出てゐない。後の一艘を王直の乗船に擬し、別の島に入港したとするのは、少し穿ちすぎようか。種子島の鐵砲傳來の記録にその名が見え、まもなく五島に根據地を置いたことを、ピントーの紀行と照合せて、さう推定せられる。これが認められるとすれば、彼は種子島から博多へ行つて、助才門ら三人を誘つて双嶼港へ往市し、一時期を開いたのである。

附記 ピントーの琉球漂着は、冒險航海記第一三七章から一四二章の記事によると、彼らは女性を除き二十四人で大レキオスに坐礁した。上陸した所で逮捕され Sipantor 部落に留置されたのち、七レグア離れた Pongol の町につれて行かれた。訊問に對しては、タニシユマへ行く途中、火の島附近にて九十二人のうち六十二人が溺死し、二十四人が助かつたことを答へた。それをきゝ、王は明人の報告によつて彼らに死刑を執行せんとしたのを取止めたが、解放せんとしたとき、海賊の一中國人が四隻のジャンクと共に入港した。

彼は運びこむ略奪品を主に分配することを條件として、この國を隠れ場とするのを許された私掠船長で、ポルトガル人最大の敵であつた。前年南澳港 (Damou) で、リマ生れのランセロット・ペレイラがキャプテンとして彼と戦ひ、そのジャンク數隻を焼き、二百人を殺したから。彼が水をさしたため、王は彼らを四ツ裂にして街頭にさらす命令を出した。幸ひ、共に囚はれてゐた海賊のポルトガル人の妻が兩頬をひつかいて血だらけになつたのが同情を呼び、婦人たちが連署狀を作つて皇太后に陳情したので、赦された。四十六日滞在した後にリャンポーへ行く中國人のジャンクに乗つた。——と。

三、海上を制覇するに至るまでの活動

上にも觸れたやうに、窮河話海卷六の海市に、

王直：於乙巳歲^{○嘉靖廿四年}住市日本、始誘博多津倭助才門等三人來市双嶼。明年復行風布其他。直浙倭患始生矣。

とあり、王直が日本へ往つて誘引して來てから、倭商の來市する者は相繼いだ。朱統：議處夷賊以明典刑以消禍患事にひく稽天と新四郎の口詞にも、嘉靖二十五年に林陸觀が薩摩へ渡航して船を壊したために滞在してゐたとき、通番ラータの林瀾四が大明貿易の利を説きに來た、とある。それで島主は稽天らに金を貸して船を造らせ、二十七年春に双嶼港の許二を目當にして寧波へ遣はしたが、紹興府の再審口詞には、

^(嘉靖)天文二十六年丁未六月内、有一倭船一隻到双嶼港往來。：向來無有倭人過上國。至今船船俱各帶有本國之人、前來

販番。尙有百數倭人在後來船内未到、等因。

と述べてゐる。二十六年は窮河話海市にも「丁未、胡霖等引誘倭夷、來市双嶼」と見えるが、同じ件であつたかどうかは分らない。

同じ朱統の奏議にも、副使魏一恭の呈文に抄せる續獲海賊陳瑞の口詞によるとして、

内稱：嘉靖二十五年同山陰：趙柒・金世傑、紹興白：永安四人、俱於七月内到双嶼港下徽州人方三橋船主船上。去年十二月過日本、遇風潮打破、修理不起。今年方三橋雇得日本船一隻。四月初八日起程、十九日徑到烏沙門。二十一日孝順洋、拏得王家塘船一隻・烏沙河條船一隻。使至毛頭洋大佛頭。二十三日船上水手王□益、：上岸尋接濟王三。寧波地方羅米十石、買酒五罇回下船内。五月初二陳瑞上山、被哨船人拏住。其日本船中、止有倭夷二十人。：途中不曾相遇許二船隻。：其大船打探得有官兵船藏躲下八山畧内、不敢進双嶼港。：：：等因。とある。いづれも倭夷を伴ひ、双嶼港の許二を頼りにして續々來市したのである。

從來、日本と明との貿易は貢賜の形式を取つて行はれ、入貢するに非ざれば互市に來なかつた。從て始めて博多の助才門を誘つて市易に來た王直は、嘉靖における兩國の通商史に特異の地位を占めると云へよう。(窮河話海の海市にはそれによつて「直・浙の倭患始めて生ぜり」とし、また同流連の王直伏誅の註では「大禍を構成せり」とあるが、それは王直を誤解したもので、彼に責任はない。後節參照) 上引の海市によれば、翌二十五年にも王直は双嶼港の地を風布したとある。しかし、二十六年に彼が寧波へ行つた記録はない。双嶼港は二十五年、許兄弟の破産によつて引き起された諸事件で、通番・夷人・官府の相互不信と呪咀とが高まり、正常な取引は難しくなつてゐた。王直は、早速そこをさけて、穩かに私市のできる他の海島へ移るべく、日本における足場の準備に費したのではなからうか。二十七年以後の來市場所から見て、彼はこの年に五島に根據地を置いたと思はれる。

嘉靖二十七年の五月に、双嶼港の賊巢は朱統の將兵に壊滅せられ、許二・許四も間もなく擒獲に賞金を懸けられて西洋へ逃げた。海寇議に、

〔双嶼港〕後被御史遣將官領福兵破其巢穴、：許二逸去。：王五峰名直、亦徽州人。原在許二部下管櫃。：素有沈機

勇略、人多服之。乃領其餘黨改住瀝港。

とある。この記事には飛躍がある。王直はその少し前から双嶼港に見切りをつけたので、決して許二らの餘黨を領したのでも、そのまゝ瀝港に移泊したわけでもない。彼は暫くは五島から來市してゐたのである。

先づ嘉靖二十七年には窮河話海海市に、

〔戊申^{〇廿}七年〕：双嶼港窰。於是林珣誘引倭夷稽天私市浙海。官兵擒之。又王直・徐銓^{即惟學號碧溪}誘倭私市馬蹟潭。

とある。林珣と稽天が双嶼港の堵塞されてから私市に來たやうに書いたのは間違ひで、特に王直はそれと關りなく、五島からの地理的事情による方が多からう。上引海市には王直の記事につづけて、「而陳思盼誘倭來泊大衢山。名雖稱商入切楊子江船矣。」とあるが、王直だけは、一途に平和的の市易に努めて着々實力を蓄へたらしい。間もなく、擒獲王直記に「富を致して貲られず、島夷大いに信服し、稱して五峰船主となした。」のもこの頃からであらう。次のごとく倭を驅使できたのを見ても、すでに基盤を築き上げたからこそと思はれる。

即ち窮河話海海市に、

己酉^{〇廿}八年冬、王直等誘倭市長途。

とある。また翌庚戌^{〇廿}九年には、同流連の項にも「惟時王直誘倭市長途」とあり、ひきつゞき長途へ來市した。この年は海市の項に「本年徐銓等勾引倭夷市長途。」と王直黨のことを記して、

比有盧七・沈九誘倭入寇、突犯錢塘。浙江海道副使丁湛移檄王直等、拏賊投獻。姑容私市。王直脅從倭、即拏盧等以獻。

と、倭を脅從して錢塘の賊を捕へたことが見えてゐる。この海寇の拏獻は、王直の出世に大きな影響をもたらした。彼

の上疏文には、

嘉靖二十九年、海賊首盧七搶擄戰船、直犯杭州・江頭・西興・壩堰、劫掠婦女財貨。復出馬蹟山港停泊。臣卽擒拿賊船一十三隻、殺賊千餘。生擒賊黨七名・被擄婦女二口。解送定海衛掌印指揮李轉送巡按衙門。

と記してゐる。海道に姑く私市を容れる條件で檄され、倭に捕へさせたことは明言を避け、殺した賊を千餘と誇張した外は同じである。擒拿せる船舶と貨物は、當然王直の有に歸したので、莫大の財産を得たばかりでなく、窮河話海流逋の王直伏誅の註にも「〔直〕蓋因庚戌・辛亥・壬子歲、奉檄拏賊、是故負名。」とあるやうに、彼は一躍有名になつた。しかも姑くとは云へ、私市をゆるされて私商の前途にも明るい望ができたのである。

海道から私市を默認された王直は、自ら浙海に根據を置くこともできた。記録には概ね誤つて傳へられたが、瀝港に泊するやうになつたのは恐らくこの頃であらう。瀝港に落着いて直ちに當面したのは、當時横港に巢くつてゐた廣東賊首陳思盼の問題である。海寇議によれば「瀝港は往來には必ず横港を経ねばならず、しかも屢々邀撃され」たので早急な處理を必要とした。幸に海寇議に「有一王船主率領番船二十隻。陳思盼往迎之。約爲一夥。因起謀心、竟將王船主殺害。奪領其船。其黨不平、而潛通五峰。」とあるやうに、機會は早くまはつて來た。

五峰正疾思盼之壓己。……乃潛約慈谿積年通番柴德美發家丁數百人。又爲報之寧波府、白之海道、差官兵但爲之遙援。詢知其從船出掠未回。又俟其生日飲酒不備。内外合併殺之。盡奪其財。德美所得、亦以萬計。擒其姪陳四、并餘賊數十送官。

卽ち通番柴德美に家丁數百人を出させ、海道の遙援を求めた上、その從船が不在中で、しかも誕生日の祝酒に浸つてゐるところをねらつて内外から挾撃したのである。相手が相手とは云へ、さすがに沈機勇略と評された王直らしい愼密さ

を示したものと云へよう。

陳思盼を攻殺した事件については、王直の上疏文に、

〔嘉靖〕三十年、大夥賊首陳四在海。官民不能拒敵。海道衙門委寧波府唐通判・張把總託臣勦獲。得陳四等一百六十四名、被擄婦女一六二口。燒毀大船七隻・小船二十隻、解丁海道。

とある。賊首が陳四となつたのは、擒獻を主として書いたからであらう。浙江通志卷六十 經武志に「嘉靖二十七年王直仍招集倭夷、聯舟棲泊島嶼、與內地交通貿易。時、陳四盼等自爲一黨、王直用計擒殺。叩關獻捷。」とあつて、年代も曖昧であり、姓名も陳思盼と陳四とを混合してゐる。籌海圖編では浙倭記に、それを嘉靖二十七年七月の條に繋ぎながら、寇踪圖譜の註記には三十一年のこととしてある。また、窮河話海海市には「辛亥三〇三年王直等船泊列港、又拏陳思泮以獻」と見えてゐるが、思泮は思盼に違ひないので、殺された思盼と捕まつた陳四とを混淆したものである。

王直は、陳思盼のごとき實力に頼つて横暴な振舞をする者には嚴格に相對したが、平素同業には寛大であつた。窮河話海の流通の三十年の條に「於是、龔十八亦誘倭夷寇掠直浙海邊」とあり、海市に陳思泮のことについて、「惟龔十八王直縱之、使同海市」とある、龔十八に對する態度もその例である。これは彼が人望を集めた所以であらう。陳思盼を處理した後、海寇議によれば、

…及各船餘黨回還、因無所依、悉歸五峰。後雖有一二新發番船、俱請五峰旗號、方敢海上行使。朱都堂所取福清船義官吳美幹所領、不盡還本省者、一半亦從五峰。五峰之勢於是益漲、海上遂無二賊矣。

とある。福清船の本省に還らざる者といふのは、窮河話海流通に「嘉靖乙酉〇廿八年閩浙小康。浙江海道副使丁湛傳示備倭各總官：凡福兵船勿復給支、任其歸去。福兵既歸、於路乏糧、却掠到家。福建海道馮璋得聞前情。已到、遂獲於獄。未

到、遁去之日本。益增寇賊。」と見えるものに當る。即ち双嶼港掃蕩の福清兵を給與せず歸し、掠奪しながらたどりついた者を逮捕したので、途中から遁げた者の一部が五峰に従つたのである。

かくして、彼は擒獲王直記にも「由是海上之寇、非受直節制者、不得自存。而直之名震聳海舶矣。」と述べてゐるやうに、前代未聞の霸權を確立した。誠に時運に恵まれ、またよくそれに乗じたものである。

四、瀝港における體制とその覆滅

海を制した王直の私商活動は、海寇議によると、

五峰以所部船多、乃令毛海峰・徐碧溪・徐元亮分領之。因而往來海上、四散劫掠。番人出入、關無盤阻。而興販之徒、紛醋於蘇杭、公然無忌。

とある。多數の船を部下に分領させたのは事實であつたが、「四散劫掠」したといふのは、つゞいて記された交易の自由さからあり得なからう。しかし、王直が賊を拏獻した代りに、私市をゆるされた時分の一般的状態は、俞大猷：正氣堂集卷五の議王直不可招にも、

往時亦有招賊來降者。：官府欲求事濟、只得屈法以從。既招之後、出入城郭街市、皆十五成群、佩力自衛。：或強買民間貨物、或滌汚人家妻兒。：即欲設法禁之、又恐釀成大患。：路傍之民：皆曰：賊在海上、其禍猶未甚。今、某官受金若干、而使賊在城郭之中、毒害我無辜之民。：此皆卑職所目擊者也。

と、その目撃せる所を記してゐる。かうなると、寧波府志海防書に「亡命の徒、從附するものに衆く、是より夷航海に遍く、患を爲すこと孔だ棘し」くなるのは當然であらう。

私商の黙認は、もと現地官兵の便宜的處置であつたが、それは王直の權威を高からしめた。海寇議によれば、獨り興販之徒のみでなく、「近地人民、或餽時鮮、或餽酒米。…或獻子女、絡繹不絕。」と、附近の人民までが、彼を崇め奉つたのである。恐らく彼を利用せんとした柴德美のごとき通番の勢家らが、利益のためにそれを煽り立てたことも多からう。一方、海防關係者も、その實力に壓倒され、また賄賂によつて卑窟たらざるを得なかつた。海寇議に、

邊衛之官、有獻紅袍玉帶者。如把總張四維、因與柴美德交厚、而往來五峰素熟。近則拜伏叩頭、甘爲臣僕。爲其送貨、一呼卽往。…今雖平惜本分者、亦往通之。

とある。かういふ環境は次第に王直に錯覺を起させた見え、浙江巡按御史董威の請寬海禁疏に「于是、汪五峰・徐碧溪・毛海峯等、皆以華人据近島、襲王者衣冠、刼掠瀕海諸郡邑。…」とあつて、王者の衣冠を着けるやうになつた。邊衛の官が紅袍・玉帶を獻じたのはそのために外ならない。

この頃は海盜が漸次に來寇し、三十一年には倭が舟山所に入つた。王直の上疏文によると、

三十一年、倭賊攻圍舟山所。軍民告急。李海道差把總指揮張四維令臣解救。殺追倭船二隻。

と彼が海道の依頼でそれを殺追してゐる。窮河話海の海市と流連とに「壬子拏七倭賊以獻」と見えるのも同じである。

寧波府志 海防書（及び浙江通志經武志）に「三十一年二月、王直令倭夷入定海關…」云々と記してゐるのは、恐らく窮河話海の海市に「比時、徐海誘引倭夷、亦泊列港。陽則稱商、陰則爲寇。」といふことを誤解したものであらう。同書流連によると、

時〔徐〕銓與王直奉海道檄、出港拏賊送官。海船倭、每潛出刼掠接濟貨船。遭刼掠者到列港、復遇刼掠賊倭。…尾之、識爲海船之倭也。乃告王直。直…隨戒海。海怒欲殺王直。而銓亦復戒海。乃止。

とあり、實は徐海のことである。王直は、海市に徐海の記事につづけて「又別倭船來稱海市。王直欲與冏市之、抑無所齎。濟以薪火、遂同行日本。」と見えるやうに、市易にのみ興味を持つた。寧波府志・浙江通志及び籌海圖編浙倭記の記事は全く根據がない。

舟山の倭賊を殺追して、王直は更に功を立て、その存在も一段と輝を増した。それを具體的に示したのは、萬表：海寇議に、

近自破黃巖・屠霽霽、而其志益驕。緋袍・玉帶・金頂・五簷・黃傘。頭目人等、俱大帽・袍帶・銀頂・青傘。侍衛五十人、俱金甲・銀盔・出銷明刀。坐於定海操江亭數日。先稱淨海王。僭竊叛逆。

と見える記事である。黃巖や霽霽の侵犯を理由にしたのは誤りであるが、王直は益々驕ぶり、豪勢な王者の體制を整へ、定海の操江亭に坐すること數日、遂に淨海王を自ら稱するに至つたのである。この儀式の爲された時期は不明であるが、假に黃巖・霽霽の犯された後であつたとしても、王直はそれと關係がないし、爲された場所などから見て、舟山の倭賊を拏獻したことがその直接的契機となつたのは争へなからう。

因みに黃巖と霽霽とを陥れたことは、籌海圖編の浙倭記、嘉靖三十一年の條に、

〔五月〕陷黃巖縣——二十八日、福清賊首鄧文俊等率倭夷二千、直入縣中焚燬縣治。居七日而出。

六月賊攻霽霽所……二十日賊以破黃巖得利、復攻所城。二十日夜半乘雷雨。先以草人用竹揭試、遂入城。……至天明、賊從北門而出。

とある。記事によれば、兩方とも鄧文俊らの仕業であり、窮河話海も同じに書いてゐる。それが王直の罪として指摘されたのは、王直配下の船を自由に往來させるから起つたとする感情と、王直が海を支配してゐる以上すべてのことは彼

の指揮によるとした論理のためであらう。このやうな意見は王直が私商の代表的地位に立つた時からあつたが、王直の權威が高まると共に強くなつて來た。萬表が海寇議に、海道の怠慢に憤慨して、

腰斬指揮、殺府知事、殺百戶、焚燒房屋・擄掠婦女財物。數月以來、沿海軍民被殺數萬。…塗毒生靈無有虛日、而猶混言倭寇、不實上聞。

と責めてゐるのはその現れである。當否如何に拘らず、それは王直にとって危険性を含むことに違ひなかつた。

×

嘉靖三十一年に浙直に出現しはじめた寇賊は、四月に奉化・臺州遊仙寨、五月に瑞安・嘉定寶山と黃巖、六月に霽霽、七月に太倉・吳淞に入り、遊仙寨では府知事武偉が戰死し、黃巖では縣治が陥れた。それで朝野が騒動し、王直と妥協して苟安を貪つてゐた海道が攻撃の的となつたのは當然である。明實錄の嘉靖三十一年七月癸巳の條に、浙江御史林應箕が、病と稱して離任八月に上つた布政司參政曹汴の職を革め、赴任を二月違つた參議李寵・按察司僉事李廷松の俸を停めることを奏聞して、「矧浙江近日海寇猖狂、所在騷動、而一時藩臬違限者遂至三人。此外守法任事之臣、寧復有幾。」と述べてゐる。つゞいて、彼は、

乙亥、浙江巡按御史林應箕奏四月中倭寇焚劫狀。因參署海道副使李文進・分巡副使谷嶠…等、各失事當治。給由海道副使丁湛・新推備倭都指揮張鐵、皆臨難規避、宜並罪。

と、海道の責任を追究し、吏道の振肅を圖つた。

同日の明實錄によれば、倭寇對策が議せられた中に「於是給事中王國禎・御史朱瑞登交章言」として、巡視都御史の復活を要請したのが、吏・兵二部の覆議を経て是認せられた。間もなく、

壬寅、改巡撫山東都察院右僉事都御史王忬、提督軍務巡視浙江兼管福興泉漳地方。仍敕許便宜調發兵糧、臨陣按軍法從事。巡按御史毋得干預撓阻。賊中有脅從願降者、不得一槩混殺、濫及無辜。

と、王忬が任命せられた。同時に瓊厓參將の俞大猷と、中都指揮僉事の湯克寬とを以て、溫臺寧紹と福興泉漳等處とを分守する參將とし、王忬の統制下に置いて、體制を整へたのである。

王忬は命を受けるや、即日浙江に赴いて計劃するところがあつた。俞大猷：正氣堂集卷五の議王直未可擊によると、卑職近至定海、審知烈港形勢。：如船衆兵多、分爲兩枝、：庶可收功。：今副使李文進等、議令卑職：督兵船出海揚威。賊遁且勿窮追。不遁、多方以絕其接濟。徐察事機、因時應變。於十月十八日行矣。

とあり、十月には示威的行動を取つた。しかし窮追しないやうに命令されてゐる。同じく議王直不可招に「正月二十八日在處州途中、奉軍門憲牌、着卑職等剿捕海賊王直・毛烈等。即轉往寧波、會同各官行事。」とあり、翌三十二年一月末に至り、はじめて本格的掃蕩を行ふべく將官を調集したのである。俞大猷はその議論の中で招撫を排して、

窃謂：爲今日之計、唯在振揚我兵爲急爾。卑職至彼會同各官、揚言招撫、使其不疑軍門。就于閩中多發船兵、：可收萬全之功。親自督押、直抵烈港攻剿。：其亦天厭兇類、一鼓就擒未可知也。

と述べてゐる。準備がほど完了したので、上官の優柔不斷な態度を警戒し、自分の成算のほどを示したものである。

嘉靖三十二年には籌海圖編直隸倭變記にあるやうに、正月から蕭顯らが上海に入寇した。窮河話海海市では蕭顯の記事につゞき、

賊首王十六・沈門・謝獠・曾堅等、誘倭焚劫黃岩縣。參將俞大猷・湯克寬、欲令王直拏賊授獻、而賊已去。乃議王直以爲東南禍本。統兵擊之於列港。

とある。王十六らの焚劫は、籌海圖編の浙江倭變記に「四月、賊攻松門衛。把總劉恩至追擊於舟山岑港、大敗之。」とあるに當る。たゞ浙倭記では瀝港攻撃の件が「閏三月、官兵追擣烈港賊巢」と逆に先にあり、時間が前後してゐる。若しさうだとすれば、窮河話海の記事が疑はれるのは別としても、浙倭記の註記に「賊初至、勢甚猖獗。攻城不克而去、盖依王直爲窩者也。」といふ松門衛の賊が、再び岑港方面へ逃げこむわけがなからう。吾々は、王直に賊を拏獻せしめながら、直ぐまた禍本としてその瀝港を撃つたとある、一見不自然の記事は、前引「議王直不可招」に見える俞參將の掩兵策として理解すべきと思はれる。籌海圖編は、賊を拏獻さすことをも含む、官兵の王直剿捕行動の發動時期を瀝港攻撃に誤まつたものであらう。

瀝港攻撃について、浙倭記では王忬が温州において閱圖審形をして戰略を決めたやうに記してある。しかし、これも議王直不可招・論王直未可擊に見えることなので、俞大猷のことでなければならぬ。攻撃の經過は俞參將の擊王直時風變に次のごとく述べてゐる。

卑職竊見閩溶兵船已到、兵形已著、難以示弱。即於本月初六日督兵出港。初七日進攻。具稟外、兵船往來、泊於金塘木澳。初十日瞭見賊人搬貨整帆、知其旦夕必遁。將於本月十一日早、乘潮長進攻。有八漿船勇、將賊人外欄簷纜砍斷。蒼山船勇、將賊人哨馬衝倒。大兵船直取賊船、攻擊一合。賊勢潰敗、奔山下水者數百人。而王直之船、其敗尤甚。各兵過船之間、水急風高。將兵船流吹脫過。按於港北、欲待潮退、全力返擊以收全功。不意颶風逆發、顛危至甚。欲收泊搗杵木澳、俱不可得。及飄打至路澳、風勢少息。十二日辰時至搗杵山、賊已遁去。卑職督各兵船窮追外、計其貨未收完、風未成汛、尙不得去番。若在馬蹟各澳、必當追攻也。

即ち四月六日に兵船を率ひて金塘に泊り、十一日に瀝港に攻入つたが、暴風が起つたために、賊を馬蹟山方面に遁去ら

れたのである。

この戦について、浙倭記は閏三月と誤った項に、

至是、大猷募熟諳山脉徑路之人侯得等、潜入賊營、期以十一日舉火爲號。而自移營本澳。距賊巢止隔一山。分遣張四維屯龍山、黎秀屯霽霽、遙爲聲援。夜四鼓、侯得等縱火賊營。烟燄蔽天、官兵乘之。賊驚奔爭舟、死者無算。乃大敗走。直率精銳潰圍而去。泊馬蹟潭。

と細かく出てゐる。しかし。奇怪にも暴風のことには一言も觸れてゐない。そして、四月の「官民進勦馬蹟潭、王直敗之」の項に、

十四日、湯克寬等兵船進搗賊巢、大敗之。因砲聲驚起蟄龍、官兵覆溺者甚衆。直遂走直隸地方。俞大猷又追敗之。所存僅百餘人。

とある。この十四日は明らかに前の瀝港進攻の記事に繋がるものである。颱風をこゝへ持つて來たのは、次に引く窮河話海のやうに、もとなつた資料が一連の戦闘として書かれたものを、浙倭記が追勦の分を切離し、「閏三月」にしたためと推測せられよう。なほ、王直が直隸へ走つたといふことは、直隸倭變記にもまた月を誤つて、「閏三月賊首王直犯嘉定」と見えるが、勿論彼本人が行つたとは認められない。

結局、王直は窮河話海海市流通に、

〔參將俞・湯〕乃議王直以爲東南禍本、統兵擊之於列港。追至長途、次馬蹟潭。銃砲聲響驚起蟄龍。兵船漂散。王直之船無敢定泊。於夏六月、乘風逃去之平戸。

と、定泊すべき根據地がなかつたため、夏の六月に到頭平戸へ逃れ去つたのである。

五、日本における生活と業務

前節に考へたやうに、王直は、嘉靖二十六年の頃には五島を息肩の地にし、そこから馬蹟山、長途へ市易に来てゐた。彼が五島に因んで五峰と號するやうになつたのも、この頃であらう。擒獲王直記に、

直與葉宗滿等、之廣東造巨艦、將帶硝黃・絲綿等違禁物、抵日本・暹羅・西洋等國、往來互市者五六年。致富不貲。夷人大信服之、稱爲五峰船主。

とある。記事は双嶼港初期からのことを一本に纏めて書いてあるが、文中の「葉宗滿らと廣東へ之き」の所、及び暹羅と西洋とを取去れば五島時代の描寫としても適當であらう。五島には、王直がはじめ唐船ノ浦を根據地として活動し、後に奥木場・奥浦へと遷り、大工町もその名残りである、といふ傳説が傳はつてゐる。どこまで信憑性があるかは疑はしいが、最初の根據地はその地名や當時の上陸地などから考へて、不自然ではない。彼は數年の間に忽ち發展し、五峰船主として島人の信服を集めたのである。

王直と倭人との合作につき、籌海圖編卷之八冠踪圖譜に、「許二敗沒、直始用倭人爲羽翼、破昌國而倭之貪心大熾。入寇者遂絡繹矣。」とある。日本人は武士時代から一般に刀劍に慣れ、殊に私商は自衛上、必ずそれを連れて行き、屢々相手を威壓したり、亂暴をはたらいたりしたので、倭商を誘ふことが、それを羽翼にしたやうに感じられたのであらう。しかし、王直が彼らを利用して寇掠をさせた記録はひとつもない。擒獲王直記には、

會五島寇爲亂。直有宿憾於倭。欲藉手以報、及以威攝諸島。乃請於海防官、而勦之無子遺者。而聲言宣力本朝、以要重賞。官餽米百石。直以爲薄、大詬投之海中。從此怨中國益深、頻入內地侵盜。

といふ話がある。年月の記載がないが、陳懋恒：明代倭寇考略三の四の引く浙志便覽に、嘉靖二十九年倭が昌國衛を寇掠したと見えてをり、若しこれが前引寇踪圖譜の記事に該當するとしたら、それによつて倭の貪心が熾んになった頃のことゝすべきであらう。當時の王直の言動に照して、この争は、彼が平和的市易を守るため、無軌道な武力行爲を抑へたものと思はれる。

王直の日本往來の足蹟をたどつて見ると、嘉靖二十四年に釋壽光に隨つて來たとき、若しピントーらと一緒にあつたならば、最初から五島に漂着したことになる。それから種子島へ廻航し、博多まで行つたので、薩摩と平戸へも寄つたであらう。窮河話海には、彼が翌二十五年に寧波諸島へ出かけたとあるので、その年にも日本へ行つたことがわかる。二十六年の行動に關する記録はないが、その翌年から連續的に倭を誘つて舟山東北方の諸島へ來市してゐるので、この年、日本に留まり五島の根據地を作つたらしいことはすでに述べた。さうして二十七年には徐銓と馬蹟潭、二十八・二十九年にはひきつゞき長途へ市易に出かけてゐる。貨物の處理や出航・市易の準備の必要から考へて、これは逆に云へば、それだけ年々日本へ行つたことを示すものである。

嘉靖二十九年に王直は拏賊授獻の功により、私市を默認され、瀝港に巢を作りはじめたが、この年にも日本へ戻つたとすべき節がある。曾て書苑第十卷第六号に辻善之助博士が紹介された中峰明本の筆蹟に添へた策彦の副書に、

此眞蹟：予嚮任本朝々使赴大明國之頃、予偶過六部尙書豐存淑之華第。尙書：掛此軸子於座上、而謂予曰：此是中峰甘棠之地海會精廬宗主之攸惠也。：予价于人以倭物計交易之事、然尙書寶惜不與。：翌年大明人五峰先生帶之來、獻大内義隆公。公聳予曾寓愛而賜焉。

とある。即ち彼策彦が入明の際、所望して手に入らなかつた中峰の書を、翌年五峰が携へ來つて大内義隆に獻じたこと

を云つてゐる。策彦が再渡して歸つたのは天文十九年であり、翌年に携へ來つたのは同二十年になるが、大内義隆はその年の九月に殺されたので、王直が贈つたのは春季入明の前たるべく、従つて十九年の冬頃には日本へ來たと見なければならぬ。

嘉靖三十年は、すでに瀝港に根據地ができてゐたばかりでなく、強敵陳思盼の攻殺で私市以上の大收獲を得、その整理に忙しかつたので、寧波に留まつたらしい。しかし、翌三十一年には、舟山へ入つた倭賊を拏獻して後、何も持つて來た物のない一倭船に、薪米を給して一諸に日本へ行つたと窮河話海に見えてゐる。恐らく唐物を運ばせたのであらうが、王直が如何に日本との間を頻繁に往來して私市に努めたかゞ知り得られよう。

彼と五島藩との交渉を示す資料は、何も残つていない。しかし、ピントー航海記第一百四十一章に、大レキオスが掠奪品の分配を條件として、中國の海賊に自國を隠れ場所にすることを許したとあるのは誇張であるとしても、當時、關稅代りに相應な物貨を藩主に呈上するとか、一定量を藩内にて販賣する條件を以て停泊に便宜を供與したのは方々にあつた。五島藩は管内に王直の根城を置くを許し、後には城下の福江町にも集團的居住をさせたので、兩者に約定があり、緊密に結ばれてゐたのは推察に難くならう。

もと深江と云つた福江の唐人町は、現江川橋の南岸高臺の石壘跡の残つてゐる所にあつて、その一隅には明人堂と稱する祠も残つてゐる。またその向岸の、昔江川城の城下に當るといふ所には、王直井戸と稱せられる、石板で六角に圍つた中國式井戸があり、それによつて王直一黨の居住狀況も偲ばせられる。たゞ、唐樞：論處王直奏請復總督胡梅林公に、五島を指すと見られる一節に、

〔倭國〕惟西海道之西二三島、慣構内地人交易。：諸島之外地名對海州、內有大唐街、皆我所居。中國人至此息

肩。入諸島尙距百里餘。是以王直所與交者、不及數島人耳。彼皆心服、往來行止可執。

とある。五島は息肩の地として利用し、物貨は平戸等地へ運び出して賣捌いた。たゞ邊僻な離れ島だけに、隱密を要する荷上げや出帆には好都合だつたらしく、王直らは彼本人を除き、最後までこゝにゐた。嘉靖三十六年四月胡宗憲に遣はされて、蔣洲と陳可願が五島へ來たとき、毛烈と會つたのも福江の唐人街であらう。

×

平戸における王直の活動及び生活状態を書いた直接資料は、李朝實錄の明宗十一年○嘉靖卅五年四月の條に、

己丑朔、禮曹啓與倭人調久問答之辭。……曰：今正月、聞有中原人稱五峰者、將領賊倭入寇大明矣。問曰：汝見五

峰乎？ 曰：於平戸島見之。率三百餘人、乘一大船。常著緞衣、大概其類二千餘人。又問曰：彼因見擄而在彼乎？

曰：始以買賣來日本。仍結賊倭來往作賊。

といふ記事がある。常に緞衣を着て三百餘人を率ひ、一大船に乗つてゐた王直は、勿論普通商人の生活ではない。擒獲王直記に蔣洲が訪ねたときの有様を記して、

嘉靖三十四年十一月、洲等至五島。遇王濶。道以移諭事。濶曰：無爲見國王也。此間有徽王者、島人所宗。令渠傳諭足矣。……明日直出客館見洲等。推髻左衽、旌旗服色擬王者。左右簇擁、洲等心動。坐論鄉曲、設酒食相對、情欸方洽。

と見えてゐる。右に「五島」と書いてゐる會見場所は、王直自身の上疏文には「松浦」にて會つたとあるので、倭人調久の言と對照して彼の平戸の生活を想像できよう。大曲藤内：大曲記に「五峰：唐様の屋形を立てゝ居住し」たと記してゐるのと考合せば一層明らかであらう。擒獲王直記によれば、

乃更造巨艦、聯舫方一百二十步、容二千人。木爲城爲樓。櫓四門。其上可馳馬往來。據居薩摩州之松浦津、僭曰號京、自稱曰徽王。部署官屬咸有名號。控制要害。而三十六島之彝、皆其指使。

とある。彼が定海においても、淨海王と稱して王者の體制をとつたが、それを日本でも行つたのである。

民族性が強くて排他的な日本で、王直のごとき振舞が許されたのは、彼の存在が、その藩内の經濟に利益をもたらしたからである。大曲記に、

道可様は果報も武運も満足の仁にてゆ故に、平戸津へ大唐より五峰と申す人罷着て、今の印山寺屋敷に唐様の屋形を立てゝ居住申しければ、夫をとりでにして大唐の商船絶えず、剩へ南蠻の黒船とて始めて平戸津へ罷着ければ、唐南蠻の珍物は年々満々と参りゆ間、京・堺の商人諸國皆集り候間、西の都とぞ人は申しける。

と明記してゐる。大曲記は巻首に「平戸肥州御家武運長久之次第書、祖父之書おき、又申つたへ候分、殊に道可様御物語被成たる趣、子孫ともの覺の爲あらあらに書おく者也。」とあり、五峰のことはその生きた道可（松浦隆信）時代に屬するので、ほど信頼するに足りよう。それによると、王直の平戸來住は、黒船の來航と共に唐・南蠻の珍しき物をもらし、その地を西の都とならしめた。

さうして、富裕になつた今ひとつの影響として、新豐寺年代記には、

去天文十一年、大唐船初〔て〕薩摩・豊後に渡來、日本唐物充滿。平戸に來て松浦郡富貴〔し〕、人類男女共に衰微せり。人仕い不自由。平戸に入りて女は傾城す。男は唐に渡りて盗みて死を不顧なり。

と出てゐる。これは大曲記と表裏をなす事實である。「去天文十一年」のことは恐らく鐵砲記を抄襲したものであつて、王直の平戸來住とは繋がらないが、後人には年月記載のない大曲記の記事をそれに結びつけ、この明舶を以て直ちに王

直のことゝし、王直の平戸來住を天文十一年に擬する者がある。あるひは「五峰が…居住申ければ…大唐の商船絶えず」とそれにつづく「剩へ南蠻の黒船とて始めて平戸津へ罷着ければ…」の一條を無雜作に結付けて、天文十九年ポルトガル船が寄港したのを彼の誘導によるものとする説があるのは賛成しがたい。天文十一年は松浦興信が死んで、その子隆信(＝道可)が家を繼いだ翌年に當り、松浦家が對外貿易の積極政策を取り出した時期で、窮河話海には島主が曾て殺した唐商の遺骨を收葬したとも傳へてゐる。窮河話海によれば、當時平戸は「中國流逋移家受塵、錯綜盤固。」とあり、領主の優待を受けて唐人が多數居住してゐた。しかし、王直が日・明貿易に出たのは嘉靖二十四年であり、平戸に定住したのは三十二年からである。ポルトガル船寄港との關係は、他に全く旁證がないので、論駁にも値しなからう。

然らば王直は、日本人と如何に取引してその力を持つに至つたのであらうか。これについては、明實錄嘉靖卅六、八、甲午に胡宗憲が王直の擒獲を奏聞して、

直…狎販海爲生、夷所信服。凡貨賄貿易、直多司其質契。

とあるのが、最も簡明な説明を示してくれる。質契とは貿易の券據すなはち證券であり、司るとはそれを預かつて、自分の責任において委託者のために賣買・交易を代行することである。當時の密貿易は、需要者と供給者が浮動的であり、たとへ適當な相手が見つかつても即時決濟で行けるとは限らない、支拂も現金であつたり、物々交換であつたりだが、互に信用の基礎はないのである。しかも問題の起つた場合、司法機關によつて追究しがたいので、是非とも兩方から信頼され、海上において不法を制裁する實力を持つ代行者が必要になる。正に天下郡國利病書廣東(下)に「徽人王直號五峰者、始爲倭經紀…」とあるごとく、王直は倭の經紀をしたのである。

この業務は實力と共に、來航商人の宿所や物貨倉庫の設備、賣買の斡旋、業者の保護救助もやらねばならない。王直

が嘉靖三十年に、龔十八を保護して海市を同じうさせ、三十一年に一倭船に薪米を供給して日本へ歸らせたのはその例であつた。籌海圖編の浙倭記に岑港に、逃げた松門衛の賊を「蓋し王直によつて窩を爲す者」とし、寧波府志海防書に「癸丑」夷舟漸至直隸登劫、皆依烈港之賊爲窩堵。」と云つたのもそのためである。この經紀の業は豊富な経験と資力に加へて、信望がなければならぬ困難さがあつたが、また利益も大きかつたことは云ふまでもない。王直は瀝港でそれをやつて倭商から珍重がられたのを、つゞけて日本においてやつたのである。日本貿易の行紀業務は倭商と共に明商に對しても爲されるので、五島・平戸を唐船の足場に提供して各種の便宜を與へれば、船が彼の處に集るのは當然であらう。殊に彼はある程度の文字教養を持ち、官様の生活をしてゐたので、策彦の副書には五峰先生、南浦文之には儒生と書かれたやうに、日本の各界から尊敬される条件を持つてゐた。平戸・五島地方は勿論、大内氏に中峰の書を贈つた山口と、後にその貢使徳陽を伴つて行つた豊後とも連繋があつた。條件には恵まれたので、王直は益々發展し、泰然として王者の生活をつゞけることができたのである。

六、嘉靖大倭寇と王直の死

嘉靖三十二年四月、王直が瀝港を追はれた後、五月には蕭顯の賊黨三大王・六大王らの倭船三百餘艘が上海に入寇し、縣治を焚掠した。海鹽では四月に賊船が來泊し、八大王を焚死されて乍浦から出たが、五月青村から白馬廟に至り、二大王は海寧を経て嵇山まで侵入した。南沙にゐた蕭顯らは、八月出海した後、九・十・十一月とも入寇してゐる。三十三年は南沙の蕭顯が暮から動き出して、嘉定縣城を攻め、南翔を流劫し、新來の賊と上海縣城を攻めた。史家濱の賊は三月に南匯を攻め、普陀山からの賊は曹涇より松江府城に進攻した後、海岸から南下し海鹽を流突した。この年、第二次の入寇をした徐海は陳東と拓林に巢くひ、吳德宣も拓林へ來た。

彼らは南沙の賊と共に蘇州の各縣を攻め、特に崑山城に集中的攻撃を加へたが、四十五日にして失敗し圍を解いた。海鹽の方では四月縣治を焚劫され、のち嘉興・袁花鎮を掠め、海寧・硤石を毀劫して澉浦に至り、各地ともその蹂躪に任せた。なほ、五月蕭顯は慈谿にて滅ぼされた。同月に石墩の賊は壘の男女千餘を殺して出航した。六月半には劉家港の賊千餘が崑山から吳江を経て平望へ抵り、官民はそれを王江涇に會剿した。八月に吳德宣・徐碧溪が蘇州深陶港から縣城に入り、拓林・蔡廟港の賊が青村・南漚と金山を攻めてゐる。十月には倭三千が金山を襲ひ、乍浦を攻めて海鹽へ向ひ、平湖・嘉興の諸鄉鎮を犯した。十一月に賊は呂恭鎮を犯し、朱涇にて邳兵千人を殺し、拓林賊は嘉善に入り、嘉興から湖州地方を流劫した。嘉善は犯されること十七回に達したのである。十二月も青村所城を攻落され焚殺を受けた。

嘉靖三十四年は徐海らの猖獗した年である。先づ正月に葉麻が沙口を焚掠し、海鹽・袁花鎮を犯し、崇徳の城を落した。徐海は乍浦を攻め、川沙の賊は南漚・金山を攻め、崇明に入つた。三月には新場・閘港・川沙の賊約一萬が上海城に迫り、張經の兵に阻まれた。三月半に官は賊巢を搗くべく大勢の客軍を海鹽に駐屯せしめたが、四月、賊は牽制のために分撥して出掠し、全浙を騒がせた。即ち一は金山を猛攻し軍糧を奪ひ、一は海鹽に至り蘇門に奔つた。五月中旬に鎮河・北沙の賊約一萬がまた蘇門を犯し、のち音樂墩の賊と合して省城を寇し、湖州市・北新關を焚掠した。六月に至り蘇州から海に入らんとして、吳江平望に官兵の毒殺に遭ひ、夾撃されて漸く潰えた。連敗した賊は七月拓林から逃出さうとしたが、待構へてゐた官兵に追殺され、數百人が徐海に率ひられて陶宅に屯した。この時、海門に飄到した林碧川は高瞻の烏魯美他郎らと大陳山にて圍殺された。川沙・周浦にも、賊が巢くつたが、新場の陳東は暮に附近を掠めた。なほ浙東では四月に奉化、五月・六月に餘姚に賊が入つたが、七月爵溪から上陸した倭賊百餘人が徽州・蕪湖から太平府を経て南京に侵入し、のち溧陽から宜興・無錫に至り、蘇州の滄墅關において圍斬されたこと云ふまでもない。三十五年は二月に徐海がまた拓林に入據し、新場にゐた陳東が合流した。三月には賊船が殺到せりとの諜報頻りなる中に、陶宅の賊は溧缺・蔡廟堡やヒ竈洪に、他の者は金山・青村・沈庄・寶山に入寇した。四月下旬には川沙の賊が金山に現はれ、徐海・葉麻らは嘉杭

の兵が松江に調されたのを知り、水陸一萬以上の賊を各地に分寇せしめた。彼自身は乍浦を圍んだが、九日にして解いて行つた。趙文華と胡宗憲とが王直を招くため、蔣洲を日本へ遣はしたのはこの時である。

嘉靖三十二年以來、日本から來寇する海盜は益々猖獗し、底知らず官民を煩ました。それで趙文華・胡宗憲は一策として王直を招くことを考へた。茅坤：紀剿徐海本末に胡宗憲のことを述べて、

先是、公始爲提督時、嘗與總督趙公謀曰：…人言王直以威信雄海上、無他罪狀。苟得誘而使之、或可陰携其黨也。

按：部題亦嘗有用間爲策者。於是遣辯士蔣洲・陳可願及其故嘗與王直友善者數輩、入海諭直。

と、蔣洲らを遣はした。窮河話海流連によれば、「歲己卯○卅四年…工部右侍郎趙文華經略東南、廣詢已亂之策。而通番輩

告以必得王直主通海市。乃可已亂。故遣使招之。」とある。(王直の上疏文にも「適…侍郎趙…都御史胡、差官蔣洲前來。」と見える。)この策が通番の輩に出、また海防責任者として二人とも王直を他の罪狀なきものと認めたのは興味深い。

胡宗憲が遣使を奏請したのは、明實錄の嘉靖三十五年四月甲午の條に

昨歲、浙江巡撫胡宗憲請遣使移諭日本國王、禁戢島夷。并招還通番商犯、許立功免罪。既奉俞旨、遂以寧波生員陳

可願・蔣洲往。及是、可願還。

とある。「昨歲」とは同三十六年八月甲辰の條に「憲爲巡撫時」と記してあるので、三十四年七月少し前でなければならぬ。表面的な大義名分はともかく、擒獲王直記によれば「而疏請移諭日本禁戢爲名、其實注意伺察直也。」であつた。蔣洲らは秋に出發したらしく、擒獲王直記には十一月に五島に至つたと見えてゐる。

擒獲王直記に「先是、間使徽州收其母・妻及子于金華府獄中。至是出之。豐衣食、潔第宅、奉之以爲餌。」とある。王直の上疏文によると、これはよくその心痛を和げたらしいが、特に明實錄嘉靖卅六、十一、乙卯の王直擒獲の奏聞に、

宗憲與直同鄉、習知其人。欲招之、…而奏遣生員蔣洲等持其母與子書往諭之。意謂：直等來、悉釋前罪不問。且寬海禁、許東夷市。直等大喜。

とあつて、海市を許すことに興味をそゝられた。明實錄嘉靖卅五、四、甲午の陳可願の疏陳に、

及是、可願還。言：初自定海開洋、爲颶風飄至日本國五島、遇王直・毛海峰等、言：…我輩昔坐通番嚴禁、以窮自絕、實非本心。誠令中國貫其前罪、得通貢互市、願殺賊自効。遂留蔣洲傳諭各島、而以兵船護可願先還。とある。王直の上疏文も、會見場所が松浦とある外はほゞ同じである。

招きを聽いて歸るについては、擒獲王直記にも「…日夜集所親信者計之。謝和等曰：…未可冒昧以往也。…」とあるやうに、部下は警戒的であつた。後に、毛烈・葉宗滿らに陳可願を送らせて行つたのは、それと關係があつたかも知れない。しかし王直は、窮河話海海市の戊午の條に、

歲丙辰○卅六年王直聽招以市、畏法不決。欲毛烈先行。烈子難之。邀宗滿。宗滿欲市南澳。直曰：市南澳、有利無名。

同烈行、名利兩得。宗滿聽、與童華來市烈港。

とあり、意欲を持つてゐた。彼の上疏文に、

蔣洲前來、賚文日本各諭。偶遇臣松浦、備道天恩至意。臣不勝感激。…如皇上慈仁恩宥、赦臣之罪、得効犬馬微勞、驅馳浙江・定海・外長塗等港。仍如廣中事例、通關納稅。又使不失貢期、宣諭諸島、其主各爲禁制、倭奴不得復爲跋扈。…敢不捐軀報効。贖萬死之罪。

とあるのを見ても、王直は官府の妥協を得て、瀝港時代を再現せしめんとその夢を抱いてゐたことがわかるのである。

陳可願は四月甲午の疏陳から推して、二月に歸國したらしいが、窮河話海によれば、毛烈・葉宗滿と王濡即汝賢が同行し

瀝港に泊つた。(擒獲王直記に毛烈を漏らしたのは政治的理由からであらう。)それに對し、俞大猷は議毛・葉不宜久置寧波を軍門に出して反對した。蔣洲を日本へ遣はすことになつた直後も、明實錄八月乙亥では、南京御史金澍らの建言により「有能擒斬王直來獻者、封以伯爵、賞銀一萬兩。授坐營坐府職銜事。」の賞格が懸げられるなど、朝廷の方針には決つたものがなかつた。従つて疏陳に對する部覆も、

直等本爲徧民、既稱効順立功、自當釋兵歸正。乃：第求通貢、：此其姦未易量也。宜令宗憲等：嚴加隄備。仍移文曉諭直等、俾勦除舟山等處賊巢。以自明其誠信。果海濤清蕩、朝廷自有非常恩賚。其互市通貢、姑俟蔣洲回日、夷情保無他變、然後議之。

と責任を回避してゐる。宗憲は部議に従ひ、早速舟山にゐた寇賊の敗殘兵百餘を毛らに拏獻せしめた。三月に徐海が來寇したので、宗憲は牒者を彼の營所に遣はし、王直の招降を以てその心を動搖させ、同時に毛らに徐海のことを謀つた。毛らは王直を呼びに行くことを理由に、王汝賢らを軍門に置いて日本へ歸つた。(紀剿徐海始末・擒獲王直記)

蔣洲と共に各藩を宣諭した王直は、その上疏文に、

日本：近來君弱臣強。：其國尙有六十六國、互相雄長。往年山口主君、強力霸服諸夷、凡事猶得專主。舊年四月内與隣國爭奪境界、墮計自刎。以沿海九州十有二島、俱用遍歷曉諭、方得杜絕諸夷。使臣到日至今、已行五島・松浦及馬肥(馬島・肥前)前島・博多等處。十禁三四、今年夷船殆少至矣。

とあり、三十五年三月にはその近邊の諸國を廻り終へた。王直が蔣洲らと共に宣諭したことにつき、明實錄の陳可願の疏陳による胡宗憲の奏聞に、

〔洲等〕今偶遇海峯於五島地方、即爲所說阻而旋、就中隱情未可逆睹。以臣憶度、大約有二：或懼傳諭國王、於若

輩不便、設難邀阻。或有懷戀故土、擬乘此機會、立功自歸。

と述べてゐる。後者は勿論、前者も明實錄嘉靖卅六、八、甲辰に、宗憲自身も「但義長等…眞有畏罪乞恩之意、宜…令其傳諭義

鎮・義長、…將倡亂各倭立法鈐制、勾引內寇一併縛獻、始見忠款、方許請貢。」と奏してゐることから考へて、これは穿つた意見と言へよう。

王直は、明實錄嘉靖卅六、八、甲辰の蔣洲の報告に關する記事に、

洲留徧諭各島、至豐後阻留、轉令使僧往山口等島、宣諭禁戢。於是山口都督源義長具咨送回被擄人口。…豐後太守源義鎮遣僧德陽等、具方物奉表謝罪、…護送洲還。

とあり、俞大猷：議處日本貢夷に引く蔣洲の口稱に「其王直等船五隻。待其到日、仍阻住泊外海聽候。另行呈報處。」とあるのによると、蔣洲より一步遅れて着いたらしい。明實錄の王直擒獲の奏聞に、

奉命即傳諭各島、如山口・豐後等島主源義鎮等亦大喜。乃裝巨舟遣夷目善妙等四十餘人、隨直等來市、以十月初至舟山之岑港泊焉。

とある。(倭變事略附錄には九月二十五日來着とあるが、順次に來たものであらう。)窮河話海海市に「歲丁巳○卅六年招來貢夷德陽等船一艘、泊于舟山馬墓港。遂館本山道隆觀。又招至…王直等、誘來市倭四百餘、船四艘、俱泊舟山之岑港。」と見えるのはそれである。

前引王直擒獲の奏聞によると、是時浙江は倭寇に傷み、王直らの倭船が押寄せたの聞いて恐慌し、競つて反對した。巡按浙江御史王本固は、王直を納めれば侮を招かんと奏上したので、朝議は関然として宗憲は東南の大禍を醸すと云ひ、現地の將吏もどつちつかずの態度を取つた、とある。擒獲王直記によれば、胡宗憲は豫め瀝港の追搗で王直と隙の

ある俞大猷を金山に調したが、代りに盧鏜を配し、嚴密に警備の陣を布いた。明實錄につづけて、

直既至、覺情狀有異、乃先遣邀見宗憲。問曰：吾等奉招而至、將以息兵安邦。謂宜信使遠迓。…今、兵陳儼然、卽販蔬小舟無一近島者。公其詒我乎。

とあり、王直はそれに驚いて、義子を宗憲の所へ遣はした。宗憲は國禁のことを諭して彼らを軍門に留めた。俞大猷は議計縛王直を出し、「德陽夷使の輩をして、字を書き各倭に與へ、我官兵は只だ一王直を得んと欲し、其縛縛を許せば其の他を釋くことを謂はさせよ」と建議したが、明實錄に「已而夷目善妙等見副總兵盧鏜於舟山。鏜誘使縛直等。直大疑畏。宗憲百方說之、直終不信。」とあつて、王直は疑懼を深くした。

當時は徐海がすでに前年の八月に降つて、官兵に餘裕ができたに反し、王直は孤立無援であつた。倭變事略の附録によれば、この頃に胡宗憲ははつきり王直を誅滅せよと詔されたとし、彼は戚繼光らを水陸の要害に潜伏せしめると共に、指揮夏正を死間として差向けた。

直偵知四面兵威甚盛、終無脫計。…乃復曰：我部無統、欲得毛烈攝之。胡公知其言曰：海上賊惟直機警難制、其餘皆鼠子輩、毋足慮。…遂遣烈往。直乃桀然詣軍門。時十一月也。…胡公恐激黨生變、乃陰待以禮而羈留之。

明實錄には直黨の要求に應じて夏正が質となり、軍門へは宗滿と清溪が同行したとある。しかし、宗憲が擒獲を密疏しながら「設供帳備使令、命兩司更相宴之。直每出入、乘金碧輿、…自以爲榮。」とあるやうに優遇したので、按察司の孟讓が責任を恐れ、再三身柄を求めた結果、三十七年正月二十五日に王直は漸く按察司獄に收められた。

×

王直の罪について、胡宗憲は環境に押されて擒獲の奏聞に「海氛禍首」と書き、處刑の上讞には「勾引倭夷、肆行攻

刼」とあるが、彼は上來述べたやうに、窮河話海に見える瀝港以前の記録はすべて倭を引誘して「市易」に來たものである。殊に瀝港時代は、大舶主として重ね、賊を拿獻してゐることは云ふまでもない。嘉靖大倭寇時代の王直に關係する記録を搜して見ると、籌海圖編の直倭記に嘉靖三十三年のこととして、

四月賊首王直等巢拓林——賊與徐碧溪・吳德宣等營拓林爲巢窟。連絡三百里。：間分一支自清浦白鶴港而北出太倉。分一支自劉家港入趨崑山。

八月賊攻嘉定縣——賊首王直分遣其酋吳德宣、徐碧溪、自綵陶港率衆千餘入攻縣城。直知官兵將搗其巢、乃進營於師家濱。：官兵擊之。：既而又進攻之。：無何賊由原港出海。

と見えるのがある。しかし、徐碧溪はその時すでに甥の徐海を質にして薩摩から大金を借り、王直とは離れてゐたので、その黨とは云へず、碧溪と行動を共にした吳德宣を彼が分遣したとは信じられない。

また、侵寇の中心であつた蕭顯は、籌海圖編の寇踪圖譜、蕭顯の項に、

直隸之禍、顯實首之。善戰多謀、王直亦憚而讓焉者也。

とあり、彼と縁はないのである。徐海に至つては、三十一年舟山で王直を殺さんとしたほど衝突し、彼の巢くつた薩摩は王直の連繫を持たない唯一の藩ともなつてゐた。もうひとつの、彼の義兒といふ一枝につき、窮河話海流通には、

歲乙卯^{○卅}四年：一枝誘倭入寇、燔燼湖墅民居二萬七千餘家。

とあるが、同註によると、一枝は王直の貨財を窃取して島原に置れ、それを使ひ果して出寇したと書いてある。若しさうならば、この記事は他と同行したのを誇張したと思ふが、何れにしても王直の責任は問ひかねよう。李朝實錄に見え倭人調久の辭に「仍ほ賊倭と結び、來住して賊を作す」とあるのは、徐海ら流通の入寇をみな王直の仕業と見做して

のことで、確かな根拠があるらしくはない。

嘉靖大倭寇の原因については、明實錄嘉靖卅五、四、甲午の陳可願による疏陳記事にも、

疏下、部覆：東南自有倭寇以來、有言：悉航海奸商王直・毛海峰等、以近年海禁大嚴、謀利不遂。故勾引島夷爲寇者。有言：彼國遭荒米貴、各島小夷迫于饑窘、乃糾衆掠食。國王不知者。用兵數歲、捕獲招報參差、茫無可據。

とあり、當局者でさへ、要領を得ざるを嘆いてゐる。その擧げられた兩説はいづれも倭寇の原因として正しいが、勾引者を王直としたのは當らない。籌海圖編の直倭記に「嘉靖三十二年閏三月賊首王直犯嘉定」の項に、

賊自烈港之敗、以百餘人自白馬廟而來。：掠嘉定之寶山鎮。鎮撫陳憲疑爲鹽盜、率輕兵追之。後知爲直、不敢襲。とあるやうに、王直の威勢が大きいので、その名を騙る者が多い。筑前國糸島郡岐志の岡崎氏は、古くからの豪族で曾て松浦海賊の一味だつたと云はれるが、同家の文書には「筑前國唐泊の原田右馬、性勇敢。劍槩に精しく舟楫に慣れ、明にいたりて汪と稱す」と記されてゐる。また、萬曆十九年に薩摩にゐた許儀後の福建軍門あて陳機密書にも、「關白：去年初八日、集衆諸侯於殿前。：既而召曩時汪五峯之黨問之。答曰：大唐執五峯時、吾輩三百餘人自南京地方刼掠、橫下福建。過一年全甲而歸。唐畏日本如虎。欲大唐如反掌耳。」とある。かういふ者を遽かに王直のことにするにはできなからう。

王直の上疏文に、

臣直覓利商海、賣貨浙福。與人同利、爲國捍邊。絕無勾引黨賊侵擾事情。此天地神人所共知者。

と言切つてゐるやうに、彼は平和的に海商を營んで來た。營業の規模と性質の故に、多くの人員と諸種の機構を擁してゐたけれども、それは防禦に發動することはあつても、寇盜をはたらくためのものではない。擒獲王直記に五島での體

制を記して、

則又招聚亡命、若徐海・陳東・葉明等爲之將領、傾資勾引倭酋門多郎・次郎・四助・四郎爲之部落。又有從子王汝賢、義子王漱爲之腹心。

とあるのは、敵對勢力の徐海らが入つて、肝腎な本當の部下が抜けてゐるだけでも信じられなからう。まして「三十六島之彝、皆其指使。時々遣彝兵十餘道、流劫濱海郡縣。延袤數千里咸遭荼毒。」といふのは、王直が處刑された後、宗憲の功を高めるために、彼を海賊の王として嘉靖大倭寇の罪業を恣意になすりつけたものである。

要するに王直は、常に名譽ある貿易王國を築くことを目指し、そのために互市の自由を悲願としつづけた。彼は海禁下における私商の理想を代表するものと云へよう。この事は倭寇問題を見つめて來た胡宗憲には瞭解してゐたらしく、だから趙文華と、それを許して倭寇を止めるべく招諭使を遣はした。しかし、長年の倭寇に對する憎惡と王直への危懼とで、朝野は容れようとしなかつた。唐樞：論處王直奏請復總督胡梅林公を見ても、胡宗憲がそれにつき種々苦心をしてゐたことがわかる。ところが明實錄の擒獲の奏聞記事によれば、

具以狀聞、請顯戮直等、正國法。姑准義長等貢市、永銷海患。或曲貸直等死、充沿海戍卒。用繫番夷心、俾經營自贖。御史本固闇于事機、力以爲未可。而江南人誦々言宗憲入直・善妙等金銀數十萬。爲求通市貸死。宗憲聞而大懼。疏既發、追還之。盡易其詞。言：直等寔海氛禍首、罪在不赦。今幸自來送死、…惟廟堂處分之。

とある。胡宗憲は王直に死を免れしめんと圖つたが、賄賂を納めての奏請だと言はれ、急ぎ疏詞を換へねばならぬほどであつた。かくて、讐を報ぜんと聲言した毛烈、宗憲の不信を罵つた妙善らの動きも年末には止み、王直は翌三十八年十二月二十五日に至つて、省城官巷口にて斬首に付された。政治における個人の悲しい運命である。

附記 王直については、明治政府の編する外交志稿・菅沼貞風の大日本商業史以來、多くの倭寇關係論著が觸れた。日華戦争までは、富山房編：國史辭典の王直の項に、資料として閩書島夷志・武備志日本考・明史胡宗憲傳・同日本傳を擧げてゐるによつて明らかなやうに、それらと籌海圖編の範圍で述べたものが多い。

專題の文章は、昭和二年の歴史地理に載せた後藤肅堂の「倭寇王王直」に始まるが、これは文中にも、王直について何一つ分つたわけではない、と自ら言明してゐるほど全く内容がない上に、駄辯と惡ふぎけに始終したものであつた。陳懋恒：明代倭寇考略の王直記事も間違ひだらけである。

一九五三年八月「歴史家」創刊號に載つた佐久間重男氏の「中國の或る貿易商」は、主として籌海圖編（とそこに收載された擒獲王直記）による隨筆、勿論批判はない。更に昭和三十年の東洋史學論集第四に、片山誠二郎氏は、王直一黨の反亂を中心に――と傍題した「嘉靖海寇反亂の一考察」を發表してゐる。しかし、氏は諸種の史料を比較對照して事實究明をせず、從來の王直の行蹟に對する誤解や政治的目的を以て書かれた擒獲王直記などを無批判に引用し、嘉靖大倭寇を彼の反亂として作り上げた。そして、事實に反するこの反亂を恣意に中小商人自立の途として規定し、いかにも郷紳と對抗すべき歴史的背景があつたかのごとく推測した。これが全く信じられないのは、上來の論證によつて明らかであらう。

本稿の下は一九六一年春、訪臺の際、臺灣大學文學院夏德儀教授の請に應じ、三月十六日と十八日の二回に亘り、該院の史學系學生に話したのを本にして、補訂を加へたものである。發表するに當り、夏教授の好意と雅量に感謝の意を表する。

☆ 上篇訂補：前號所載の（上）第七四頁第一行 B. Figures は B. Figuer の誤植。第七七頁以降のリンスホーテン水路誌の譯は、中村教授の御注意によりリンスホーテン協會本に據つたことを追記する。